



【2017-05-10】

遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒を楽しみ、  
人生を味わう

今週の雑感

『箇条書き「自分で考える技術」  
鷺田小彌太（著）から「考える」  
とはなにかを学ぶ』

長野修二

「考える」は、しばしば使う言葉ですが、そもそも「考える」とはどのようなことをいうのでしょうか。

もっとも、人間は、つねになにかを考えて生きている生き物ですが、自分で考えるということは、どのような状況から出発するのか、という疑問が湧いてきます。

私は、人間の日常的な生活や企業における仕事、我が家における日常的な事柄から発生する疑問や課題など、そこからなにかを考えはじめてるように感じています。

いわば自分で興味（疑問）が湧く事柄について自分なりの想像や仮設が自分の中から自然と生まれてくるようです。

あるいは、なにか自分ではしっくりといかない感じがある、といった身体感覚から疑問をもつものだったりするのでしょうか。

その身体感覚のモヤモヤ感を払拭するために本読んだり、ネットから情報を探ってみたりすることになります。

仕事などの実務的な疑問は対象が明確なだけに比較的是やく疑問が解消されることが多いのですが、社会、人間自身、あるいは自然といったように対象が広く、答えが無数にあるようなもの、反対に答えがみつからないように感じられるようなものは、当然のように身体感覚の不快感がずっと続いていくことになります。

このように書いている今でも、過去から不快に思い続けていてモヤモヤ感が拭い去れないような感覚は結構あります。

おそらく答えが見つからないまま死んでしまうことになる不快感もかなりあるでしょう。

結論からすると、考えるとは、すべて答えが見つかるわけではなく、そのプロセスの中で自らが感じることを幅広く「考えてみる」という行為そのものが重要ではないか、と考えています。

それは専門の時代といわれているなかで、私には、むしろいろいろなことを幅広く学びながら解をみつけようとする必要がある時代ではいか、という自分なりの仮説でもありました。

自分の社会人生活が、営業から総務、人事、経理と幅広く経験したこと、また比較的経営者の近くで経営判断など、経営の生の事実をみてきたこ

となども影響しているのですが、経営に関する全体像を身体感覚として感じていたからかも知れません。

しかも、経営には経営者の人間性を含む幅広い要素があることなども経営活動の実戦を通して掴むことができました。

経営活動では、常にあらゆる事態が起こるものですが、私は、その場で幅広く情報を集めて自分で考えて答えをみつけながら活動していたように思えます。

また、経営活動における疑問や課題は、考える範疇からすれば優しい部類ではないでしょうか。

ビジネスとは、なんらかの答え（間違っている場合もしばしばありますが）を出して実行する以外にないからです。

責任あるポジションにいれば、当然その結果責任を担うことになります。その意味では、むずかしい答え探しではなく、あくまで実行することと結果を出すことです。

もっとも、今は責任あるポジションにいる人間が、実行し、結果によって責任を担うということをしない時代でしょうか。

考える人は多くいるようですが、実行し、結果を出して責任を全うする人が少ないように感じています。

今日のテーマとは少し離れますが、「考える」という点では、人間ほどその対象としてむずかしい存在はないでしょう。

人間の複雑性からして一筋縄ではいきません。

家庭における妻や子供たちを対象にしてみても、その困難さがわかりません。

まして、他人においてその理解をすることは、永遠の課題でしょうか。

話を本題に戻して、この本は、1994年か、1995年頃に購入しましたが、その当時は少し読んだだけでもチンプンカンプンで、すぐに書棚に放り込んでしまいましたが、あるとき、この本が私に「早く読んだら」と呼びかけているように感じるのです。

しかし、最初の困難さからか、さらに10年ほどほっておいたように思います。

なんとか読めるようになったのは、2005年頃だったような気がします。

ほんとうにとっつき難い本でしたが、それでもなぜか捨てる気になれず書棚に飾っていました。

当初、哲学者が書いた本ですから、かなりむずかしいというイメージをもっていたのですが、10年前と違いわかりやすく感じるようになっていました。

偶に、このような本に出会うことがありますが、しばらく経って読んでみると、読み進めることができることがしばしば起こります。

人間とは不思議なもので時間の流れの中で本は変わっていないのですから、おそらくそれを受け入れることができる自分自身に変化しているのでしょう。

本との出会いは、このようなことも面白さのひとつでしょうか。

だから、書店などで出会う本でなにかピント感じるものがあるものはまず買っておくことにしています。

この本の面白い部分は、1990年代のはじめに書いた本でありながら、今日の状況を見事に予測、予想していることです。

当時、まだWindows95発売前であり、ネット社会など私には想像できませんでしたが、著者の予想は見事です。

また、この本を読んだ2005年当時ですら、私のなかにあった「現場を知らないで管理の仕事などできるのか」という疑問に対する解もあるように思えました。

そのいくつかを本文から抽出してみます。

先ず本文64P「繰り返しになりますが、専門はもつべきなのです。

しかし、一専門だけでやりおおせないということなのです。いってみれば、どんな専門にも対応できうる『一般的能力』を身につけることが肝心だ、ということです。

ですから、問題はスペシャリスト（一芸家）か、ジェネラリスト（多芸家）か、という対立にあるわけではありません。スペシャリストがジェネラリストな性格をつねに要求され、そのための自己訓練をしておかなければならず、ジェネラリストは、つねにスペシャリストな性格を自己啓発するような訓練をしておかなければならない、ということです。

高度技術社会、高度知識社会、情報化社会では、ますます専門知識や技術をもつ人が要求されます。と同時に、社会全体が複雑に絡み合ってい

ますから、さまざまな知識や技術ばかりか、社会を横断するさまざまな領域に対して、ジェネラル（一般的）な立場から考察し、行動しなければなりません。

-中略-

社会が高度に細分化され、専門化してしまった。それで、専門家は、社会全体のこと、他領域のことに対して、関心も、考察もおよばない。したがって、現在ほど、素人の立場、素人の目が必要な時代はない、といわれます。これは本当のことです。

でも、素人も、程度の問題です。現在は、高知識、高技術の時代です。これは、専門的なことに関してばかりではないのです。ごく普通の日常生活で、二十～三十年前では、およびもつかなかったような知識が要求されるのです。かつての専門家をしのぐようなことを、素人がやすやすとできなくてはならない時代なのです。素人の能力水準が、ぐ～んとあがったということです。

ですから、素人ということ误解しないほうがいいのです。現在ほど、無知や無能がとがめられる時代はないのです。私は素人だから、ということが口実にならなくなった時代だ、ということです。『素人』の中から、プロ紛いの人がどんどん出てくるのも、プロの能力が落ちたからではありません。そうではなくて、素人全体の能力がうんと上がったせいなのです。

この素人の知識や能力は、いうまでもなく生まれつきのものではありません。社会全体が、高度知識、高度技術になったのだから、おのずと身につくものだ、というのでは不十分なのです。

それにはやはり、そうおうの教育と訓練が必要なのです。ずぶの素人ということではないのです」

本書では「自分で考える技術」とありますから、「考える」ということはどういうことなのか、についてそれはひとつの技術だという視点で書かれています。

「考えると技術」ではいささか違うようにも思えますが、自分で考えたことをどのように他人に理解してもらうかという点で「考えると技術」は一体化されていると、著者はいっています。

その解は、また自分自身で出していくしかありません。

いそがしい社会ですが、たまに時間をみつけて、このような本をじっくりと読んでみることに意味があるのかもわかりません。

私は頭脳明晰ではありませんので、箇条書きにして自分に必要な要素を取り込むことにしています。

そのような中で、どうしても考えがすっきりとしないときには、本書に戻って読み直します。

人間は日々変化しているようですから、時間軸の流れの中で、最初に読んだ感じ方とかわる場合も多々あります。

しかし、そこからまた新たな視点がみつかることも多いものです。

自分にとって必要だと思われる本は、何度でも戻って読み返せばよいだけです。

[箇条書き「自分で考える技術」鷺田小彌太（著）から「考える」とはなにかを学ぶ](#)

[「自分で考える技術」鷺田小彌太（著）](#)

[「自分で考える技術」鷺田小彌太（著）](#)